

イザヤ58-59章「主の義に至る民」

1A 主の喜ばれるわざ 58

1B 形だけの義 1-5

2B 憐れみの行い 6-12

1C 良い行いの実 6-9a

2C 悔い改め 9b-12

3B 安息日 13-14

2A 恵みによる義 59

1B からだに働く罪 1-15a

1C 罪による仕切り 1-2

2C 手足口に進む罪 3-8

3C 引き離されている者たち 9-15a

2B 主ご自身の義による救い 15b-21

1C 悪に報いられる主 15b-19

2C 主のご契約 20-21

本文

イザヤ書 58 章から読みます。私たちはイザヤ書の後半、主の慰めのところを読んでいますが、その後半の中でも最後の部分、クライマックスを読みます。一つの目の区分 40 章から 48 章までは、ペルシア王キュロスを通して、主がバビロンで捕らえられていたユダヤ人を解放することが背景でした。そこから、私たちが世からキリストによって救い出してくださる計画を示されています。そして二つ目の区分、49 章から 57 章までが、主のしもべメシアの働きが書かれていました。そこで、主が救われるのは、お仕えすることによってであり、その奉仕はついに、自分の咎をご自身の身に受けるところまでのことです。そして同時に、エルサレムが慰めを受ける預言に満ちていました。

そして 58 章からは、「救いの完成」について書いてあります。神は、ご自分の救いをどのように完成されるのか？それは、神の栄光の宿る御国に私たちを導かれることによって完成されます。そこで、黙示録の最後の部分、20 章にある千年間のキリストの統治と、21-22 章にある新天新地の幻と似ているものが出てきます。キリストがおられ、栄光に輝く、世界の国々がそこに集まってくるエルサレムの姿です。

1A 主の喜ばれるわざ 58

58 章そして 59 章は、イスラエルの民が自分の行いでは決して救われたい、罪深い姿を告白するところから始まります。しかし、主が、だからこそ、彼らの義ではなく、ご自身の義によって救われ

ることを見ていきます。まさに、ロマ書 1 章から 3 章に、パウロが論じている信仰の義について、イザヤが預言をしているのです。

1B 形だけの義 1-5

¹「精一杯大声で叫べ。角笛のように声をあげよ。わたしの民に彼らの背きを、ヤコブの家にその罪を告げよ。

前回、57 章を読みましたが、神の宮におけるすべての国々の祈りと礼拝の幻を見せた後で、イスラエルにあった背きの罪を教えました。それは、かつてのカナン人と同じように茂みの所で、忌まわしい偶像礼拝と性的錯綜を指摘していましたが、再び、背きの罪を告げると言われますが、そのような明らかな罪ではありません。

² このわたしを、彼らは日ごとに求め、わたしの道を知ることを望んでいる。義を行い、神の定めを捨てたことのない国のように、彼らは正しいさばきをわたしに求め、神に近づくことを望んでいる。

^{3a}『なぜあなたは、私たちが断食したのに、ご覧にならず、自らを戒めたのに、認めてくださらないのですか。』

彼らが行なったことは断食でした。レビ記 16 章に、贖罪日の時に、断食するように呼びかけられています。けれども、イスラエル人は自発的に断食をしていることが多くありました。ある注解には、「断食とは、それに伴う肉体的苦痛を通して、深い罪の自覚と畏れをもって神に近づくことであり、熱心な祈りと悔い改めを表現する行為です。」¹とありました。聖書全体で、断食が良く行われていたことを見ることができます。

^{3b} 見よ。あなたがたは断食の日に自分の好むことをし、あなたがたの労働者をみな、追い立てる。

⁴ 見よ。あなたがたが断食をするのは、争いとけんかのためであり、不当に拳で殴るためだ。あなたがたが今のように断食するのでは、いと高き所に、その声は届かない。⁵ わたしの好む断食、人が自らを戒める日とは、このようなものだろうか。葦のように頭を垂れ、粗布と灰を敷き広げることなのか。これを、あなたがたは断食と呼び、主に喜ばれる日と呼ぶのか。

断食はしていたのですが、形だけになっていたのです。57 章では、カナン人と同じような忌まわしいことをイスラエル人たちが行っていることを、主は叱責しておられましたが、ここに出てくる人々は、断食をもって、主に認められようとしていました。けれども、断食そのものが主に喜ばれるのではなく、断食が示しているものが大事なのです。それは、罪に対する悲しみと悔い改めですね。その、悔い改めの実が、彼らの行いに見ることができないのです。バプテスマのヨハネが、「ルカ 3:8 そ

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?E4%B8%BB%E3%81%AE%E5%A5%BD%E3%81%BE%E3%82%8C%E3%82%8B%E7%9C%9F%E3%81%AE%E6%96%AD%E9%A3%9F%E3%81%A8%E3%81%AF>

れなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」

あらゆる宗教的な活動、教会の活動に、たとえ熱心であっても、その人の行いからその実を見ることができなければ、その宗教的な活動に対して、主は、ここで言われているように、「それで、わたしを喜ばしていることになるのか？」と問われています。

2B 憐れみの行い 6-12

1C 良い行いの実 6-9a

⁶ わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか ⁷ 飢えた者にあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見てこれに着せ、あなたの肉親を顧みることではないか。

主が、イスラエルの民と契約を結ばれ、命じられたことには、虐げられている人々の縄目を解くことができました。また、飢えた人々に施すことも含まれていました。また、「あなたの父と母を敬え」という命令は有名です。

それらのことを行っているところに、断食の意味、つまり、罪を悲しみ、悔い改めていることが見えるわけです。取税人ザアカイのことを思い出してください。彼は、イエスを自分の家にお迎えして、こう言いました。「ルカ 19:8 主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」そしてイエスは、この家に救いが訪れたと言われましたが、救われた実が、財産の半分を貧しい人たちに施し、奪い取ったものを四倍にして返すということだったのです。

⁸ そのとき、あなたの光が暁のように輝き出て、あなたの回復は速やかに起こる。あなたの義はあなたの前を進み、主の栄光があなたのしんがりとなる。

これらの良い行いの中に、闇を照らす光があります。パウロが、ピリピ人に対して手紙を書いた時に、恐れおののいて自分の救いを達成しなさい、ということを行いました。そして、こう話しています。「ピリ 2:15-16a それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、いのちのこたばをしっかりと握り、彼らの間で世の光として輝くためです。」

^{9a} そのとき、あなたが呼ぶと主は答え、あなたが叫び求めると、『わたしはここにいる』と主は言う。

主の命じられていることを守る中で、主は祈りに答えてくださいます。「ヨハ 14:13-15 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしがそれをしてあげます。もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずで
す。」彼らは、断食をすることによって、主から祈りを聞いていただくこうとしていましたが、そうではなく、主の命じられているところに留まっている時に、祈りを聞いてくださるのです。

2C 悔い改め 9b-12

^{9b} もし、あなたの間から、くびきを除き去り、虐げの指をさすことや、邪悪なことばを取り去り、¹⁰ 飢えた者に心を配り、苦しむ者の願いを満たすなら、あなたの光は闇の中に輝き上り、あなたの暗闇は真昼のようになる。

先ほどのことを主は繰り返しておられますが、ここでは、彼らの悪い行いからの悔い改めを強調しています。彼らは事実、虐げの指を指していました。奴隷に対して、ひどいことをしていたのでしょう。また、邪悪なことばを投げかけていました。それを取り去りなさいということです。そして、むしろ良いことを貧しい人や、苦しんでいる人にします。そうするならば、光輝くようになります。闇が暗くなれば、それだけ、光が強くなります。

¹¹ 主は絶えずあなたを導いて、焼けつく土地でも食欲を満たし、骨を強くする。あなたは、潤された園のように、水の涸れない水源のようになる。

主の命令に留まっているならば、恵みによって強められます。また、霊的な渇きも癒されます。むしろ、人々を潤す者となります。ここでは、イスラエルの民が文字通り、物理的に食欲を満たし、渇きをいやすような人々になるでしょうが、霊的にも言えるでしょう。霊的に満たされて、強くなります。また、自分に、いのちの水が潤うだけでなく、水源のように他の人々も潤すことになるのです。

¹² あなたのうちのある者は、昔の廃墟を建て直し、あなたは代々にわたる礎を築き直し、『破れを繕う者、通りを住めるように回復する者』と呼ばれる。

このようにして、主が回復される時に、その働きに関わる者となります。私たちも、そのようになりたいです。すでに建て上がっているところにいるのではなく、いつも、廃墟のあるところに建て直す。礎を築き直す。破れを繕うのです。神が初めに人を造られたところから、人々がずれてしまっていますが、その破れを繕っていきます。

3B 安息日 13-14

¹³ もし、あなたが安息日に散歩くことをやめ、わたしの聖日に自分の好むことをせず、安息日を『喜

びの日』と呼び、主の聖日を『栄えある日』と呼び、これを尊んで、自分の道を行かず、自分の好むことを求めず、無駄口を慎むなら、¹⁴ そのとき、あなたは主をあなたの喜びとする。わたしはあなたに地の高い所を踏み行かせ、あなたの父ヤコブのゆずりの地であなたを養う。——主の御口がそう語られる。」

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ、という主の命令です。前回の学び、56章4節以降でも安息日の大切さを主は説かれていました。私たちキリスト者は、具体的に、土曜日に安息をするという戒めの下にはいませんが、その安息日の実体であるキリストのところに安息を取るといことは、大前提として知っておくべきです。私たちが救われて、それでその救いの過程の中で、良いわざが現れるわけですが、その基となるのは礼拝です。主を礼拝することが、喜びであり、栄えある時なのです。

そして安息日について、「これを尊んで、自分の道を行かず、自分の好むことを求めず、無駄口を慎むなら」と言っていますね。安息日について、礼拝について、私たちの心の葛藤は、自分のやりたいことをすることです。立ち止まること、休むことをいやがるのです。けれどもそうではありません。また、無駄口をたたきます。また、礼拝かよ・・・と、義務的になっているのです。そうではなく、この日を信仰によって、喜びの日、栄えある日とするのです。そうしていく中で、主ご自身が自分の喜びとなります。ネヘミヤも、仮庵の祭りで集っていたイスラエル人たちに対して、「主を喜ぶことが、私たちの力です。」と言いました。

そして、イスラエル人に対する約束ですが、高い所を踏み行かせるというのは、他の低い所を見下ろせますので、外敵から守られ、安全なのです。それから、その地で養われます。

2A 恵みによる義 59

このようにして、主を第一として、悔い改めて変えられることこそが、単なる断食によって主を求めること以上に大事です。しかし、そこには神の恵みが必要です。自分自身では到底、できないからです。イスラエルの人々が、神の恵みに立ち帰る時が来ます。自分自身が、どうしてもなく罪深く、自分で自分を救えないことを告白していきます。それで初めて、神が、彼らの義ではなく、ご自分の義によって救われるのです。

1B からだに働く罪 1-15a

1C 罪による仕切り 1-2

¹ 見よ。主の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。² むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

イスラエルの残りの民は、自分たちが断食をしても、ご覧になっていない。認めてくださらないと嘆いていました。しかし、それは、神が救えない、その力がないということではないのです。主の手は力強いです。その腕がどれだけ力強いかは、出エジプトの出来事によって明らかにされました。それから、主が、彼らの祈りを聞くことができない、耳の遠い方でもありません。主は、何度となく、ご自分の民の祈りを聞いてくださいました。エリヤの祈りを思い出します。バアルの預言者との対決で、水をかぶせたいけにえに主が火を降らせてくださり、いけにえは焼き尽くされました。イサクのお嫁さんを探しに行ったアブラハムのしもべは、祈り終わらないうちに、リベカがやってきて、神が祈りを聞いてくださいました。

問題は、彼らの咎、罪なのです。これが仕切りになっています。神が初めに造られたアダムは、神から命じられていた、取って食べてはならないという善悪の知識の木の実を食べてしまいました。蛇がまず妻のエバを惑わし、そしてエバがその実をアダムに与え、夫も食べました。すると、自分たちが裸であることを知り、いちじくの木の葉で腰を覆いました。

そして、これまでと同じように主がその中に入って来られました。「創世 3:8-10 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。神である【主】は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」彼は言った。「私は、あなたの足音を園の中で聞いたので、自分が裸であることを恐れて、身を隠しています。」主が彼らから離れたのではありません。アダムが、自分が裸で、それで聖い神に触れるのを恐れて、それで退いて隠れたからです。神が彼から離れたのではなく、アダムが神から離れたのです。これが罪のなせる業です。罪が仕切りとなったのです。

その仕切りを取り除くために、主はあらゆることをしてくださいました。幕屋によって、その仕切りによって祭司が、いけにえを血を携えてご自身に近づくようにされました。神殿がありましたが、ついにご自身の御子のからだがいけにえとなり、その流された血によって、仕切りを取り除かれました。その時に神殿の幕が上から下へと裂けました。

したがって、罪のあるうちは、神は祈りを聞かれないのです。詩篇 66 篇 18 節に、「もしも不義を私が心のうちに見出すなら主は聞き入れてくださらない。」とあります。エレミヤが、墮落していたユダの民のために、必死に執り成して祈りました。ところが主が、祈るのをやめよ、とまで言われたのです。「エレ 15:1 たとえモーセとサムエルがわたしの前に立っても、わたしの心はこの民に向かわない。この民をわたしの前から追い出し、立ち去らせよ。」義人モーセやサムエルが祈ったとて、本人たちが悔い改めて、罪を捨てようとしなければ、主はその罪のゆえに何もできません。

しかし、その時に聞かれる祈りがあります。それが罪の告白です。イザヤの預言にも、ありましたね。「55:7 悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうす

れば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」罪を言い表す祈りは、聞かれます。そこで初めて、主がご自身の憐れみによってすべての不義を清め、それで関係が修復するのです。

2C 手足口に進む罪 3-8

³ 実に、あなたがたの手は血で、指は咎で汚れている あなたがたの唇は偽りを語り、舌は不正を告げる。⁴ 義をもって訴える者はなく、真実をもって弁護する者もない。空しいことに頼り、嘘を言い、邪悪をはらみ、不正を産む。⁵ 彼らはまむしの卵をかえし、くもの巣を織る。その卵を食べる者は死に、卵をつぶすと毒蛇が飛び出す。⁶ そのくもの巣は衣にはならず、自分の作ったもので身をおおうこともできない。彼らのわざは不義のわざ、暴虐の行いがその手にある。

主が、彼らがどれほど墮落しているのかを、明らかにしておられます。手も指も、血で汚れています。これは、自分が書いている文字がそういう類のもの、という意味合いも含まれるでしょう。そして、口です。これが、いかに不正に満ちているかを話しています。また、偽りがあるかを話しています。空しいことや嘘が、いかに人に害を与えているかを、まむしの卵に喩えています。また、偽りを、蜘蛛の巣で衣を作るようなものであることを話しています。今の、この日本においても、同じものを見ますね。古今東西、この罪は同じです。

⁷ その足は悪に走り、咎なき者の血を流すのに速い。その思いは不義の思い。暴行と破滅が彼らの大路にある。⁸ 彼らは平和の道を知らず、その道筋には公正がない。自分の通り道を曲げ、そこを歩む者はだれも平和を知らない。

手と指、口の次は、足です。自分が動いていくことです。実行に移して、人を傷つけていきます。

パウロが、ここの箇所の一部を取り上げて、人がすべて神の前で罪を犯している話をしたことを覚えていますか？長くなりますが、ロマ 3 章 9 節から 18 節まで読みましょう。

9 では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。10 次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もない。11 悟る者はいない。神を求める者はいない。12 すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」13 「彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。」「彼らの唇の下にはまむしの毒がある。」14 「彼らの口は、呪いと苦みに満ちている。」15 「彼らの足は血を流すのに速く、16 彼らの道には破壊と悲惨がある。17 彼らは平和の道を知らない。」18 「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

ユダヤ人は、自分たちがユダヤ人であることを誇り、ユダヤ人であるからこそ救われると信じていました。しかし、ユダヤ人たちに向けて預言者や詩篇の著者は、これらの言葉を語っており、だれも義人はいないことをパウロは論じているのです。私が表現するならば、「人は息を吐くように罪を犯している」と言ってよいでしょうか。骨の髄まで罪で侵されていて、もはや手遅れ、救いようがないのです。

3C 引き離されている者たち 9-15a

⁹ それゆえ、公正は私たちから遠く離れ、義は私たちに届かない。私たちは光を待ち望んでいたが、見よ、闇。輝きを待ち望んでいたが、歩くのは暗闇の中。

主語が入れ替わったことにお気づきでしょうか？主が、イスラエルの残りの民に「あなたがた」と語りかけ、それから「彼らは」と語られましたが、その言葉に対して、彼らが「私たちは」と言って、自分たちの罪を告白しているのです。彼らは、主の語られたことに、そのまま同意しているのです。これが、「告白」の本来の意味です。主が言われたのだから、それに同意しますということです。

公正からも義からも遠く離れています。そして光を待ち望んでも闇なのだということです。ここに気づくのは大事ですね。望んでいるのに、自分の罪の性質によって、その逆のことを行っているという実際を認めています。

¹⁰ 私たちは見えない人のように壁を手さぐりし、目が無いかのように手さぐりする。真昼でも、たそがれ時のようにつまずき、強健な者の中にいる死人のようだ。¹¹ 私たちはみな、熊のようになり、鳩のようにぶつぶつうめく。公正を待ち望むが、それはなく、¹² それは、私たちの背きが御前で多くなり、私たちの罪が不利な証言をするからだ。まことに、私たちの背きは私たちとともにあり、私たちは自分の咎をよく知っている。

いかに自分たちが闇の中を歩んでいるのかを、これまでもかというくらい徹底的に言い表しています。神ご自身がおられて、光が照らされているのに、それでも盲目のようになって、闇を歩んでいるといっています。そんな中で、公正を待ち望んだって、うめくしかありません。むしろ、背きがますます明らかになっていると告白します。「まことに、私たちの背きは私たちとともにあり」という言葉が、徹底的な、自分が罪人であるという告白です。

¹³ 私たちは主に背き、主を否んで、私たちの神に従うことをやめ、虐げと反逆を語り、心に偽りのことばをはらんで告げる。¹⁴ こうして公正は退けられ、正義は遠く離れて立っている。それは、真理が広場でつまずき、正直さが中に入ることもできないからだ。^{15a} そこでは真理は失われ、悪から遠ざかっている者も略奪される。

自分たちが主に背き、否んでいて、それで虐げや偽りを語っていると言っています。根本に彼らは、近づいたのです。すべての悪や偽りが自分たちの、主への反逆から来ています。だから、自分たちがいくら公正を願っても、それはやってこないと言っています。そして、広場というのは公の場ではありますが、そういうところに、正直さや真理はなくなっています。それで悪から遠ざかっている人々も、被害を受けています。このように、徹底的にへりくだっています。他のだれのせいにするのでもなく、神に対する罪がこのようにさせているのだと認めているのです。

このような祈りを献げた人で思い出すのは、神殿のところまで来た取税人です。パリサイ人は、自分が取税人のようでないことを感謝し、週に二度も断食をしていて、十分の一も献げていると祈っています。けれども取税人は、神殿の中にも入らず、遠く離れて立って、目を天に向けようとしていません。そして、自分の胸をたたいて言いました。「神様、罪人の私をあわれんでください。(ルカ 18:13)」そうです、自分には何も正しいことはできないのです。できようがないのです。からだに沁みついている、罪の性質をそのまま認めて、神の前には憐れみだけを求める、というようなへりくだりの祈りを、取税人は献げました。そしてイエスによると、彼が「義と認められて家に帰った」と言われています(18:14)。

2B 主ご自身の義による救い 15b-21

1C 悪に報いられる主 15b-19

ここから、神の恵みによる救いが始まります。義というのが、自分の義ではなく、神から賜物として与えられる義であり、それによって救われます。

^{15a} 主はこれを見て、公正がないことに心を痛められた ¹⁶ 主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに啞然とされた。それで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を支えとされた。

主は、人に介入される時に、ご自身の心と一つになっている者を探されます。しかし、今、ここでは、執り成す人さえいないのです。心を痛め、啞然としておられます。だからこそ、ご自身だけで救いをもたらせました。ご自分の御腕で、ご自分の義を支えとして、救われます。これが、有名な聖書の箇所、ヨハネ 3 章 16 節です。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」ご自分の御子によってのみ、救いをもたらしてくださるのです。

¹⁷ 主は義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。¹⁸ 主は彼らの仕打ちに応じて報い、はむかう者に憤り、敵に報復し、島々にも報復をされる。

主イエスは、初めに来られた時に、へりくだったしもべとして来られて、十字架の死によって、神

の義を示されました。けれども再び来られる時は、御怒りを現して来られます。イスラエルの残りの民は、神の恵みによる救いを、主イエスの再来によって悟ることになるのです。もちろん今でも、イエスを信じるユダヤ人たちはいます。けれども、民全体として信じるのは、主が再び来られる時であります。そして、その時は、諸国の軍隊が一斉にイスラエルに集まり、エルサレムを攻める時に、それらに報復することによって救われるのです。「ゼカ 14:2-3 「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」【主】が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。」

¹⁹ そうして、西の方では主の御名が、日の昇る方では主の栄光が恐れられる。それは、主が激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっているからだ。

主イエスが再び来られる時、それはどこに来たとか、特定できるものではなく、むしろ稲妻が走るように、すべての人が見るように来られます。

2C 主のご契約 20-21

²⁰ 「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中の、背きから立ち返る者のところに。——主のことば。」

これが、イスラエルの残りの民に対する主の究極の約束です。背きから立ち返ろうとする者たちがいるところに、遅すぎる前に戻ってきてくださるのです。そして敵を滅ぼされて、彼らを救います。「いや、これは旧約の時代のことだろう。将来のことではないでしょ。」という人たちが、クリスチャンの中からも出て来そうですね。いやいや、ロマ 11 章で、新約聖書でパウロが、イスラエルは関係がないと言っている異邦人キリスト者に警告しているんですね。彼らが倒れて、自分が立っていると高ぶってはならないと。そして、イスラエルが救われることを結論として論じているのです。「ロマ 11:25-26 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えるようにするために、この奥義を知らずにいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。」

²¹ 「これは、彼らと結ぶわたしの契約である——主は言われる——。あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、子孫の子孫の口からも、今よりとこしえに離れない——主は言われる。」

契約という言葉、とっても大事です。それは、主ご自身が確約したことにご自身を縛ることを意味します。主は契約の神です。ノアに対して契約を結ばれました。そして、アブラハムに対して契

約を結ばれました。そしてダビデに対しても結ばれましたね。彼の世継ぎの子が、永遠の国を受け継ぐことになるということです。神の国が、彼の子、メシアによって成り立ちます。イスラエルに対する召しと選びが変わることはないのです。そして神ご自身の口から出た言葉は、こうした契約の神ですから、決して変えることがないのです。

私たちはとかく、どうしても、自分自身のうちに神の約束の成就がかかっているかのように思っ
てしまいます。けれども救いは、神がキリストにあって行われたことに基づきます。新しい契約は、
エレミヤが預言しましたが、主語が、「わたし」すなわち、主ご自身がしてくださることなのです。主
がご自分の名に誓って、行うと言われたのです。そこに自分が信頼を寄せるのです。

今回は、主がエルサレムに戻ってこられて、主の栄光の輝きを受けたエルサレムに対する預言
から始まります。